

言語理論における真の説明を目指して  
 Toward a Genuine Explanation in Linguistic Theory  
 林慎将、中島崇法、大宗純、杉本侑嗣

○趣旨と背景

本ワークショップは、近年の生成文法理論で取り扱われている基礎仮説および理論的帰結を整理することで、言語理論における真の説明の探求とは何か、また今後どのような研究課題が残されているかを明らかにする。とくに、第161回日本言語学会におけるノーム・チョムスキー氏による講演（以下、LSJ Lecture）などで提案された枠組みのチュートリアルをおこない、主要論点を整理するとともに意見交換をおこなう。

LSJ Lecture では、近年議論されている大併合 (MERGE, Chomsky (2019, 2020)) が提案されるに至った経緯が説明され、その帰結として様々な現象が分析されているが、これらの概念的・経験的根拠を正確に把握するにはいくらかの背景知識を要する。そのため本ワークショップでは、近年の極小主義理論の展開を追ってきた講師四名が LSJ Lecture を理解するための論点を整理するとともに、今後の理論的・経験的研究を発展させる上での基礎を提供する。

○ワークショップ構成

[1] 司会者による趣旨説明 (5分) (中島崇法)

[2] 研究発表 (各20分)

発表1：極小主義理論の基礎仮説群 (林慎将)

発表2：Merge から MERGE へ (杉本侑嗣)

発表3：理論的帰結と分析 (I) シークエンス形成と等位接続構造について (大宗純)

発表4：理論的帰結と分析 (II) コピー形成とコントロール構文について (中島崇法)

[3] 全体討論 (登壇者間での議論および参加者との質疑応答を含む) (35分)

○各発表の題目と要旨

1. 極小主義理論の基礎仮説群 (発表者：林慎将 (九州大学))

発表1では、生成文法理論が目標とする真の説明 (genuine explanation) とはどのようなものを明らかにし、またそうした真の説明を追求するにあたり必要とされる基礎仮説群を整理する。

極小主義理論では、強い極小主義のテーゼ (Strong Minimalist Thesis) のもとで言語理論が満たすべき条件が厳しく制限されている。とくに、言語理論は学習可能性 (learnability) および進化可能性 (evolvability) を同時に満たすものでなければならず、これを満たさない理論は (有益な記述であったとしても) 真の説明とはなりえない。このため、普遍文法 (UG) に帰せられる操作である併合 (Merge) を最大限シンプルにするとともに、自然言語に見られる諸特性を併合および言語外の一般特性 (第三要因 (third factor, Chomsky (2005))) のみに還元し説明する研究プログラムが追求されている。

2. Merge から MERGE へ (発表者：杉本侑嗣 (University of Michigan))

発表2では、近年の研究で併合の概念を刷新し大併合 (MERGE) が提案されるに至った経緯を整理する。併合から大併合への刷新において重要なのが、作業空間 (Workspace, WS) と呼ばれる概念の導入である。作業空間とはある派生の時点における統辞体 (Syntactic Object) の集合であり、大併合は統辞体 P, Q を含む WS から集合 {P, Q} を含む WS への写像として定義される。このとき第三要因の一種として考えられる資源

節約 (Resource Restriction) の原理が働く結果、内併合 (Internal MERGE) と外併合 (External MERGE) のみが適格な構造構築操作として利用可能となる。

併合概念が刷新された背景の一つには、これまでの統語論研究のなかで併合の例とされた内併合と外併合に加えて、並列併合 (Parallel Merge, Citko (2005); Citko and Gračanin-Yuksek (2020))、遅発併合 (Late Merge, Lebeaux (1988); Fox (2002))、側方併合 (Sideward Merge, Nunes (2004)) といった併合の「変種」が様々提案されたことで、併合自身の概念整理を図る必要があったことが挙げられる。本発表では大併合やそれに関連する装置を紹介するだけでなく、こうした背景にも可能な限り言及したい。

### 3. 理論的帰結と分析 (I) シークエンス形成と等位接続構造について (発表者: 大宗純 (関西外国語大学))

発表1と発表2での議論を踏まえ、発表3と発表4ではこれらの理論的帰結および具体的構文分析を検討する。発表3では、シークエンス形成 (Form Sequence) と呼ばれる操作を取り上げ、節構造の分析にどのように応用されるかをみる。シークエンス形成は、長年にわたる未説明の問題だった非構造的等位接続 (unstructured coordination) を捉えるために提案された。シークエンス形成はさらに、語根-範疇化詞構造の分析にも応用されている (Chomsky (2020))。

LSJ Lecture ではとくに、シークエンス形成を用いて等位接続を含む文が分析されるほか、節構造一般にかんしても重要な提案がなされている。そのため本発表では、こうした議論を具体的に追いつながらシークエンス形成の経験的射程を探る。

### 4. 理論的帰結と分析 (II) コピー形成とコントロール構文について (発表者: 中島崇法 (東北大学))

発表4では、併合概念に付随する重要な帰結として、コピー形成の問題を取り扱う。併合が生み出した構造を意味・音韻インターフェイスで解釈するにあたり、コピーと反復 (repetition) をどのように区別するかという問題が近年さかんに議論されてきた。

LSJ Lecture では、最小探査 (minimal search) と意味の二重性 (duality of semantics) にもとづいたコピー形成の具体的メカニズムが提案されている。またその経験的帰結として、コピー形成の観点からコントロール構文の詳細な検討がなされている。この提案はコントロールの移動理論 (Hornstein (1999, 2003)) を背景としながらも、その問題点をコピー形成のメカニズムを用いて克服しようと試みたものである。本発表ではこうした議論を踏まえ、統語計算と意味・音韻インターフェイスとの結びつきを新たな観点から検討したい。

#### ○参考文献

Chomsky, Noam (2005) "Three Factors in Language Design," *Linguistic Inquiry* 36, 1-22. / Chomsky, Noam (2019) "Some Puzzling Foundational Issues: The Reading Program," *Catalan Journal of Linguistics* Special Issue 2019, 268-235. / Chomsky, Noam (2020) "The UCLA Lectures," ms., <https://ling.auf.net/lingbuzz/005485> / Citko, Barbara (2005) "On the Nature of Merge: External Merge, Internal Merge, Parallel Merge," *Linguistic Inquiry* 36, 475-496. / Citko, Barbara and Martina Gračanin-Yuksek (2020) *Merge: Binariness in (Multidominant) Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA. / Fox, Danny (1999) "Reconstruction, Binding Theory, and Interpretation of Chains," *Linguistic Inquiry* 30, 157-196. / Hornstein, Norbert (1999) "Movement and Control," *Linguistic Inquiry* 30, 69-96. / Hornstein, Norbert (2003) "On Control," *Minimalist Syntax*, ed. by R. Hendrick, 6-81, Blackwell Publishing, Oxford. / Lebeaux, David (1988) *Language Acquisition and the Form of Grammar*, Dissertation, University of Massachusetts. / Nunes, Jairo (2004) *Linearization of Chains and Sideward Movement*, MIT Press, Cambridge, MA.